

【 2 】

氏名	文 璇 奎 むん すん きゆう
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 38 号
学位授与の日付	昭 昭 44 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	朝鮮漢字音の聲母論

論文調査委員 (主査) 教授 浜田 敦 教授 泉井久之助 教授 小川 環樹

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、序論、本論および結論に分かれる。序論においては、漢字が朝鮮に伝入した時期、および朝鮮漢字音体系の成立に影響を及ぼした中国音系について論じ、本論文作成に当って利用した主要文献について説明し、さらに、論文構成上の方法を論じている。

本論は、さらに引論と各論に分け、引論においては、朝鮮の語音と漢字音に現存する initial (声母) を説明し、各論では、唇、舌、牙、齒、喉、半齒、半舌の各音の声母について、歴史的考察を行なっている。

また、結論においては、本論の内容を要約しているが、それに先立って、朝鮮漢字音を持つ特殊性、およびそれを考究するに当って問題となり得るものを幾つかとりあげて、著者自身の見解を述べている。以下、本論の内容を、順を追って概観すれば次の通りである。

現代朝鮮字音において存在する声母は、P, P', m, t, t', n, k, c, c', s, h, r の12類であるが、李朝の初期頃には、このほかに、牙音の疑母 ㄱ があり、併せて13類であった。

唇音は、現在 P, P', m の3母であり、李朝初期でも同様であったと考えられるが、古代から重唇音と軽唇音とが区別された形迹なく、また、新羅時代頃には、次清音 P' も存在しなかったと思われる。それが発生した時期は、おそらく、三国時代から高麗朝の鷄林類事の作られた12世紀の初頃までの間と推定される。また、全濁音 (b など) は古来存在しない。

舌音は、李朝初期より現代まで、t, t', n の3母で、やはり全濁音は古来存在しない。また、舌頭音と舌上音とは区別されない。さらに、次清音 P' は、やはり新羅時代頃にはなく、それが発生したのは、それ以後鷄林類事の作られた12世紀の頃までの間であろう。また、もと舌上音に属した2, 3等韻の字と、もと舌頭音に属する字のうち4等韻のものは、口蓋音化して、c, c' になった。この変化は、固有朝鮮語音の変化に伴って生じたもので、16世紀末から17世紀にかけて完成したものと思われる。舌音の口蓋音化は、t, t' だけでなく、n においても見られ、もと舌上音の n, および、もと舌頭音4等韻の n は、口蓋

音化して  $\dot{n}$  となるが、語頭では、さらに変化して、脱落し、initial zero となる。

牙音の声母は、現代では、k だけであるが、李朝初期には疑母  $\text{ㄱ}$  が存在した。16世紀に入ってから、間もなく、zero となる。なお、現在「夫、快、噲」などの字は、例外的に  $k'$  の声母を持つが、これは、李朝初期にも同様であった。しかし、これは全くの例外に過ぎず、朝鮮字音として次清音に  $k'$  の声母が一般的に存在するとは言い難い。なお、固有朝鮮語音では  $k > c$ 、 $k' > c'$  のような口蓋音化が現われているが、字音では全く見られない。

歯音は、元来歯頭、歯上、正歯の三音に分れる。しかし、朝鮮字音では、その区別は古来なく、また、もとの全濁音は、全清あるいは次清音に混入している。現代の歯音系声母  $c$ 、 $c'$ 、 $s$  は、李朝初期から同様の状態であったと考えられる。 $c'$  は、やはり新羅時代から鷄林類事の頃までの間に発生したものであろう。「氏」「雙」など数歯の字は、initial  $ss$  を持つが、これは、牙音の  $k'$  と同じく、全くの特例で、字音体系上正式の声母とは認められない。また、歯上音の「士」系と正歯音の「食」系のものは、古来  $s$  であったと考えられる。

喉音については、現代語では  $h$  のみが存在する。李朝初期には、このほかに影母を表わす特別な文字が用いられたことがあるが、これは、中国音韻学の理論から割り出された人為的なもので、実際の発音上は、喻母と共に、initial zero であったと考えられる。また、全濁音の匣母は、曉母と区別なく、 $h$  であった。

半歯音の日母は、新羅時代から、initial zero であったと思われる。ただし、李朝初期には、 $z$  を表わすと考えられる諺文を、この声母にあてているが、これは、おそらく、やはり音韻学の理論から割り出された、人為的な表記法であろう。

半舌音の来母は、やはり、新羅時代以来、 $r$  であるが、語頭に現われる場合には、一般語音の法則に従って、 $n$  あるいは zero となる。すなわち、韻母が、 $i$ 、 $ia$ 、 $iə$ 、 $io$ 、 $iu$ 、などの場合、あるいは、その様な母音を含む韻母においては、zero、その他の韻母の場合には  $n$  となる。これも、おそらく、新羅時代から変りはないものと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

漢字は、中国だけでなく、周辺の東洋諸国、日本、朝鮮、安南（ヴェトナム）などにも伝えられ、それぞれ特有の字音をもって用いられている。それらの漢字音を、特に歴史的立場から研究することは、単に、それぞれの言語の史的の研究にとって必要かつ有意義であるばかりでなく、本来の中国語音韻史の研究に対しても、大きな寄与をなすべきものと思われる。しかしながら、資料の欠如や方法論上の困難さなどの理由によって、従来、思わしい成果があがっていたとは必ずしも言い難いのである。朝鮮漢字音研究の場合も、その資料が、主として、諺文（ハングル）の制定された、15世紀なかば以後、すなわち李朝初期ごろを上限とするもので、それ以前、高麗、三国時代の状態は、ほとんど明らかにされていなかった。

著者は、このような悪条件のもとで、わずかに残された、高麗時代の鷄林類事、三国時代の史書三国遺事、および三国史記などに散見する、漢字音訳資料や、吏読によって表わされた朝鮮語（新羅郷歌、地名人名など）にもとづき、三国時代から高麗朝期にかけての、朝鮮漢字音の中、特にその声母の状態を再構

しようと試みた。また、諺文の制定された李朝初期以後、現代に至る間の、朝鮮漢字音声母の変遷について、可能な限りの資料を駆使して、精細に記述している。このように、朝鮮漢字音の声母について、古今を通じ、概括的に論ぜられたものは、韓国、および、その他の国の学界を通じて、ほとんど見ることでできなかったところである。また、そこから誘き出された結論には、多くの新しい事実があり、学界に貢献するところが、きわめて大きい。もちろん、数少ない資料にもとづいてなされた、その論には、限界があり、また、著者自身の採った方法にも、多少の混乱が見られるけれども、それは、このような研究テーマの性質上、ある程度止むを得ない欠陥であると言わなければならないであろう。

なお、副論文の一は、朝鮮漢字音声母の中、特に問題となる濁声母が清濁の区別を持たない朝鮮語にうけ入れられる場合の問題について論じたもの、また、その二は、やはり朝鮮字音資料の一として重要な漢字音訳資料「朝鮮館訳語」についての考察であり、それぞれにユニークな研究として評価されるべきものと思われる。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。